



平成24年に特に注意を要する病害虫

てんさいの褐斑病



○平成23年はてんさいの褐斑病が2年連続で多発となり、道東地域を中心に発生量が多くなりました。

○多発の要因として、初発がやや早く、初発期以降は気象の条件が一時期を除き本病が多発しやすい高温多雨傾向となり、秋季もこの傾向が継続したことが挙げられます。9月の大雨により防除作業に入れず、多発に至った例もありました。

○褐斑病の初発は伝染源(罹病した葉など)の密度が高い場合に早まる傾向にあるので、平成23年に多発した地域では注意が必要です。また、秋季の高温傾向が予想される場合は、9月下旬まで薬剤散布の要否を見定めて適切な防除を実施する必要があります。

○平成23年のような多発年でも抵抗性品種作付圃場では被害を免れた事例が多く見られました。このことから、本病対策として抵抗性品種の導入に努めてください。

トマトならびにミニトマトの葉かび病



○減農薬あるいは無農薬栽培の手段として本病に対する抵抗性品種の導入が進められていますが、近年、抵抗性遺伝子 Cf-9 を持つ品種を侵すレース(新レース)が道内で確認され、道内各地で発生が認められています。

○このため、葉かび病抵抗性の品種を栽培していても本病の発生に注意する必要があります。

○抵抗性品種でも発生を確認した場合には農薬による防除が必要です。初期の薬剤防除の徹底が特に重要であるため、ほ場観察を励行し、薬剤防除のタイミングが遅れないように注意しましょう。

○多湿にならないよう換気に努め、肥料切れに注意し、初発時から罹病葉の除去を徹底し、薬剤散布に当たっては葉裏にも薬液が十分かかるようにしてください。

○新レースが発生した場合でも、トマトでは平成19年度に道南農業試験場から提案されている試験成果を参考にして、減農薬栽培に取り組むことが可能です。

New! 新たに発生の認められた病害虫 (詳しくは病害虫防除所ホームページをご覧ください)



水稲のイネドロオウムシ
(フィプロニル剤抵抗性個体群の出現)



小麦の赤かび病
(クレソキシムメチル剤耐性
Microdochium nivale の出現)



大豆のダイズシストセンチュウ
(抵抗性品種打破系統の出現)



大豆のオオタバコガ
(大豆の莢での加害)



大豆のヨモギキリガ
(大豆の複葉での加害)



小豆の萎凋病
(新レース(race 4)の発生)



ばれいしよの紅色斑点病
(*Setophoma terrestris* と同定)



ばれいしよの夏疫病
(塊茎表面での灰黒色陥没症状)



平成24年に特に注意を要する病害虫

New! 新たに発生の認められた病害虫
(詳しくは病害虫防除所ホームページをご覧ください)



ばれいしょのネギアザミウマ
(ばれいしょの葉での加害)



てんさいのハスモンヨトウ
(てんさいの葉での加害)



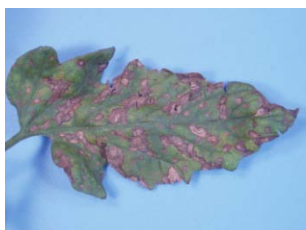
キャベツのホソバハイロハマキ
(キャベツの葉での加害)



ブロッコリーの黒すす病
(花蕾と葉身での黒変症状)



ほうれんそうのネギアザミウマ
(ほうれんそうの葉での加害)



トマトの斑点病
(*Stemphylium lycopersici* と同定)



かぼちゃのつる枯病
(かぼちゃの果実での腐敗症状)



ぶどうの晩腐病
(*Colletotrichum acutatum* の追加)



カーネーションのべと病(新称)
Peronospora dianthicola と同定
カーネーションの葉での黄化症状



ぶどうのつる割細菌病(新称)
Xylophilus ampelinus と同定
ブドウの葉での小斑点、蔓でのつる割れ症状、
果実でのかいはう症状など



アロニアとカシスでのウスムラサキイラガ
(葉での加害)



小豆の茎腐細菌病
(*Pseudomonas syringae* と同定)



だいこんのリゾクトニア病
(だいこんの根部での
菌核付着症状)



みずなのリゾクトニア病
(みずなの立枯症状
および葉腐症状)



さつまいものヒルガオトリバ
(さつまいもの葉での加害)